

研究要旨

精神科病院のみならず医療全般に於いて、安心・安全な医療環境を確保する必要性が高まっている。すなわち、暴力を未然に予測してこれらを防ぐ教育研修²⁾の在り方が問われている。この点でこれまでに唯一の実績を有す、包括的暴力防止プログラム(以下 CVPPP)を中心に、精神科病院等に勤務する幅広い職種を対象として当該プログラムの基本的理念と技術の普及(課題Ⅰ)を図り、併せてその有効性の検証(課題Ⅱ)と一般診療科への応用(課題Ⅲ)を採った。

最終年次は、過去 2 年間に引き続いて、以下の 3 課題を進めた。

I. 厚労省公募事業：平成 30 年度精神科医療体制確保研修(精神科病院における安心・安全な医療を提供するための研修)に、国立病院機構(以下 NHO)と日本精神科病院協会(以下日精協)の両団体が応募し、NHO は 28 年度新設した、CVPPP の理念と基本技術を普及させる一日研修「精神科病棟における安心安全な医療を提供するための研修」を、29 年度 7 ヶ所から 30 年度は 8 ヶ所(花巻・茨城・東京・小諸・岡山・福岡・鹿児島・肥前)で全国開催した。日精協は 3 ヶ所(大阪・長野・東京)で開催した。30 年度もアンケートを両団体共通のものを用いて、受講前後の安心・安全に関わる主観的変化等を調査し、研修ニーズや普及の在り方を調査研究した。

II. CVPPP の有用性・有効性を検証：過去 2 年間で、1 日研修を受けた病院職員と 4 日研修受講者にアンケート法による追跡評価を行った。

III. CVPPP の一般科への適用を探る試み：一般科における導入 1 日研修「一般科病棟における安心安全な医療を提供するための研修」を作成し、3 つの協力病院(自治体・公立・民間)での開催を最終年度に実施し、好評を得た。

研究協力者：省略

B. 研究方法

課題Ⅰ.

A. 研究目的

「医療観察病棟を有する病院を中心に普及してきた包括的暴力防止プログラムの実績を評価し、精神科病院等に勤務する幅広い職種を対象として、当該プログラムにおける基本的考え方の普及を図る。」とする厚労省の事業公募概要を踏まえ、人材養成のあり方とその普及法について検討することを目的とする。

平成 30 年度も「精神科医療体制確保研修(精神科病院における安心・安全な医療を提供するための研修)」に、日本精神科病院協会(以下日精協)と国立病院機構(以下 NHO)の両団体が応募した。28、29 年度の反省を踏まえ、①広報の協力②プログラムは双方独自③受講対象は幅広く④アンケートは同一を用いる等とし、日精協は 3 ヶ所(大阪・長野・東京)、NHO は 8 ヶ所(花巻・茨城・東京・小諸・岡山・福岡・鹿児島・肥前)で全国展開した。

1. 対象者

精神科病院その他に勤務する医療従事者

2. 調査様式

導入1日研修受講前後に、自記式アンケート調査法を行った。

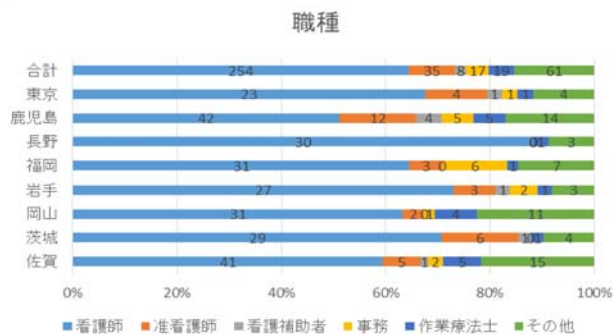
C. 結果

1. NHO 主催

主要な結果を掲載する。

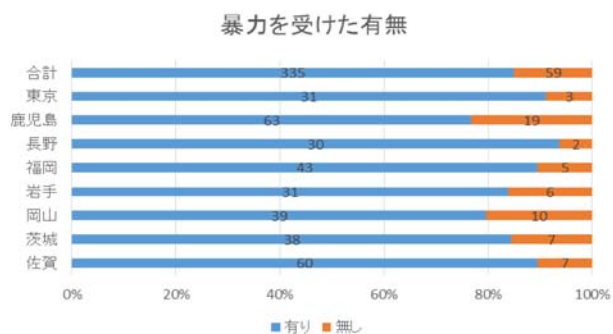
1) 参加者 職種など

性別では、過去2年同様な傾向で、やや男性が多く、職種経験も6年以上の経験年数の受講者が多かった。職種は、看護師が多いのは当然としても、その他（訪問・介護・少年施設職員）が増えている。

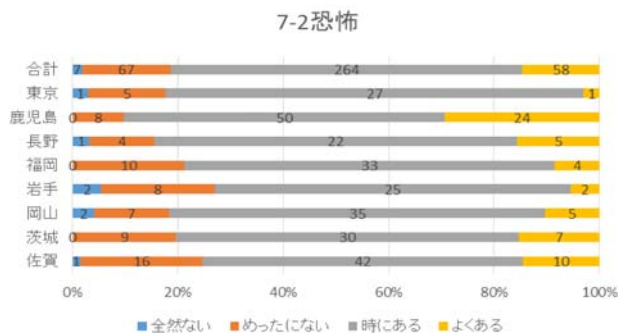


2) 職場の暴力

職場での暴力経験は、過去2年の数字では約9割弱に及ぶ。本年度も同様な傾向であった。



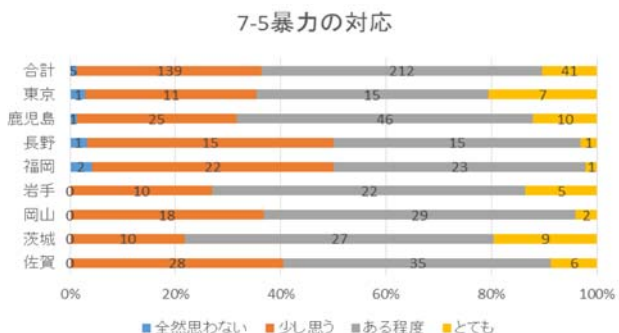
恐怖を感じた経験は、「時にある」と「よくある」を合わせて、60%強に及んでいたが、今回



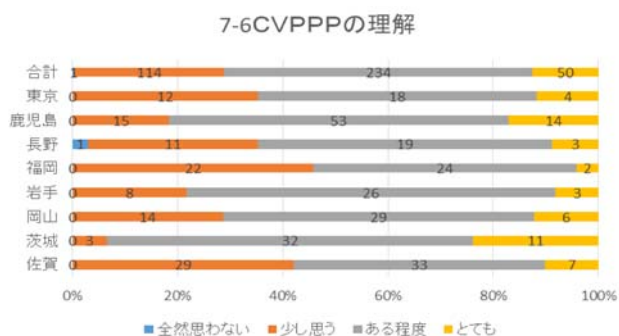
も会場に拠っては7割を越す会場もあった。

2) 研修後の効果について

研修後に、落ち着いた対応、心理的介入の実施、暴力への対応の自信度について尋ねた項目では、『全く思わない』と回答したものは数名であり、ほとんどの回答者が、何らかで『少し思う』『ある程度思う』『とても思う』に回答していた。



CVPPPへの理解については、『ある程度思う』『とてもそう思う』を合わせると、7割を越えている。

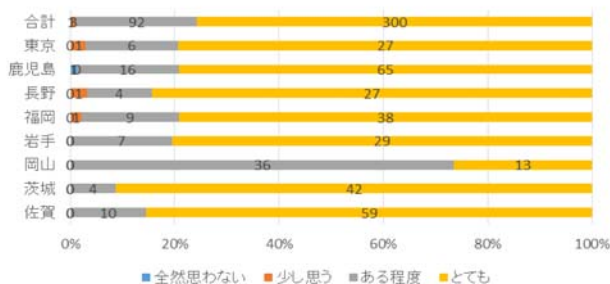


3) 研修の必要性について

研修の必要性については、91.7%が『とても思う』であった。専門職の必要性は、76.5%が『とても思う』となったが、岡山会場に限っては、参加者の26.5%しか過ぎず、『専門職』が如何なる

職種でどのような資質と能力を有した人なのかという認識が異なっている可能性がある。

7-9専門職の必要性



C. 結果

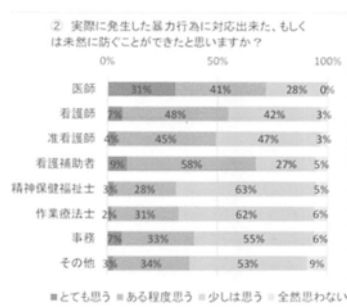
2. 日精協主催（大阪・長野・東京）

別途報告

D. 考察と課題

日精協とNHOの両団体が、本年度も事業を展開した。前者は、利便性のよい都会の大会場で行い、3年間で1838名の受講者を産み出した（大都市圏会場集合普及方式と仮称する）。後者は、コンパクトながら開催地を地方含めて1047名の受講者を産んだ（地域ブロック普及育成密着方式と仮称）。座学にも時間を割き、精神医療現場未体験者をも幅広く視野に置いた日精協と、現役を対象に、理念と実際的な技術にも時間を当てたNHO方式には、それぞれに違いと特徴はあるも（NHO方式は総受講者数では劣るも、石川県と高知県のみを残して万遍なく受講者が日本全国に広がっている）、アンケートの結果では、主観的な感想ながら、いずれも自己効力感上昇の実感、研修の必要性等で同様な回答結果が得られている。このことは、本事業が現場の要請に応えた研修内容であり、継続する必要性に疑問の余地はないと思われる。

実際、日精協主催の受講者に、追跡アンケートが為された結果を見ると（3年



間の受講1838名 回答率80.3%)、実際の現場での効果を、半数以上の者が効果を実感しているとする驚きの結果が見られている。これは、主観的なアンケート調査法には限界があり、研修の有効性を客観的に示すevidenceではないが、その一方で暴力件数の変化、隔離・拘束の減少等の客観的な数字で研修の有効性をevidenceとして示すことは、暴力の背景に様々な因子が絡みあっているだけに、方法的には困難であろう。この点で、課題を残しており、研修の有効性をevidenceとして示すには、課題IIのような長期的な変化を追う手法が現実的かと思われる。

E. 結論

最終年度も日精協とNHOの両団体が1日研修事業を行った。[今年度、総数]で受講者数を示すと、日精協[929名、1838名]、NHO[422名、1047名]であった。NHO方式では、都道府県万遍なく受講者が広がっていた。いずれの方式でも参加者の満足度と研修の必要性への認識は極めて高かった。

F. 研究発表（別紙4）

1. 論文

・Shimosato S, Kinoshita A: Degree of Anger During Anger-Generating Situations Among Psychiatric Staff Nurses: Association Between Nurses' Attitudes Toward Service Users' Aggression and Confidence in Intervening in Aggressive Situations. 56(9) 51-59 Journal of Psychosocial Nursing and Mental Health Services, 2018

・木下 愛未, 下里 誠二: 精神科スタッフナースの怒り感情喚起場面での怒りに関与する要因の検討 - 認知傾向・感情・態度との関連 - (17) 13-21 看護科学研究, 2019

2. 学会発表

G. 知的財産権の出願/登録状況

1. 特許 なし

2. 実用新案 なし

3. その他

主要課題Ⅱ.

「CVPPPの有用性・有効性を検証」

A. 研究の背景と目的

CVPPPは、実績と一定の評価を得ながらも、「真に安全・安心の医療環境を確保し得る」というエビデンスは未だ明らかでは無い。初年度は、CVPPP導入1日研修を4病院の職員に行った。最終年度は、研修受講6ヶ月後の病棟勤務者の、暴力についての意識を追跡調査した。

B. 研究方法

1. 調査対象者

研究参加の承諾がとれた4施設に勤務する医療従事者に対して、CVPPP トレーナー研修(4日間)と1日研修を受講してもらい、受講後6ヶ月間病棟勤務を行った時点での安心・安全に関する自記式質問紙調査票を実施した。

2. データ収集方法

調査内容

- 1) 年齢、性別
- 2) 職種、職業経験年数、CVPPP 受講経験(1日研修、トレーナー4日研修)
- 3) 受講後、6ヶ月間臨床現場での暴力に対応する自信度(8項目)、病棟勤務における安心感・安全感、CVPPP 活用度

3. 倫理的配慮

無記名調査で個人情報扱わず、任意自由参加であること。辞退しても不利益のないこと、調査票の記載の所要時間は5~10分程度であり心理的苦痛は伴わない。データ処理は回収後外部とつながらないコンピュータで統計的に行った。なお、肥前精神医療センターの研究倫理委員会に審査申請し研究実施を承諾されている。

C. 結果と考察

1日研修とトレーナー研修の2群間比較

	1日研修 n=19	トレーナー研修 n=29	有意差率 (%)
	中央値 (四分位範囲)	中央値 (四分位範囲)	
病棟の安全感	3.00 (2.00~4.00)	3.00 (2.00~3.00)	n.s.
病棟の安心感	3.00 (2.00~4.00)	3.00 (2.00~4.00)	n.s.
CVPPPの活用度	3.00 (2.00~3.00)	3.00 (2.00~3.00)	n.s.
攻撃的な利用者にも落ち着いて対応できる	3.00 (2.00~4.00)	4.00 (3.00~4.00)	*
利用者の攻撃に対して身体介入ができる	3.00 (2.00~3.00)	4.00 (3.00~4.00)	**
利用者の攻撃に対して対応することに自信がある	3.00 (2.00~4.00)	4.00 (3.00~4.00)	*
利用者の攻撃に対して心理学的介入ができる	3.00 (2.5~3.00)	4.00 (3.00~4.00)	*
攻撃的な利用者を感じても安全だと感じる	3.00 (2.5~3.00)	3.00 (2.00~4.00)	n.s.
利用者の攻撃に対して効果的な技術を持っている	3.00 (2.00~3.00)	4.00 (3.00~4.00)	***
利用者の攻撃性に対してニーズを満たすことができる	3.00 (2.00~3.00)	3.00 (3.00~4.00)	**
利用者の攻撃に対して防衛できる	3.00 (2.00~3.00)	4.00 (3.00~4.00)	**

P<0.05* P<0.01** P<0.001*** Mann-Whitney検定

・研修終了後6ヶ月後の病棟勤務時において、研修による有意な差は無く、安心感・安全感を感じている。

・1日研修終了者よりもトレーナー研修終了の方が、より暴力的な患者へのケアを行う際に自信を持っている。

・1日研修修了の男女間では暴力に対峙した際の自信度に有意差はなかった。トレーナー研修修了者の男女間において、男性の方が、安心感と自信を持ったケアを認識していた。

これらは、半ば予想された結果とも言えるが、半年後も受講後の効果が維持されていることは、注目すべきであろう。協力病院の受講者数は、本研究参加によって、一般的精神科病院よりもはるかに履修者率が高い。なお本来のCVPPPは、トレーナー資格にしろインストラクター資格にしても、定期的にフォローアップ研修を受けて、常に理念の再確認と技量の維持を図る。フォローアップの機会、あるいは病院全体全職員に対して、研修を定期的に受講する組織姿勢・文化が根付けば(安全安心感の上昇、治療的な対応と文化)、CVPPPの理念の浸透と相俟って、惹いては暴力の発生件数が減少することが期待されよう。

E. 結論

協力4病院の研修受講スタッフに、受講後半年の追跡調査を行った。研修効果は、維持されていたが、トレーナー4日研修者の男性でより、安全なケアの展開に自信度

が高かった。

病院全体の受講者率を増やし、さらにフォローアップを重ねれば、ケアへの自信や余裕が治療文化に昇華されて、惹いては暴力発生件数の減少に繋がることが期待されよう。

F. 研究発表 (別紙 4)

- 1. 論文
- 2. 学会発表

G. 知的財産権の出願/登録状況

- 1. 特許 なし
- 2. 実用新案 なし
- 3. その他

主要課題Ⅲ.

「CVPPPの一般科への適用を探る研究」

A. 研究目的

一般科の暴力等実態において CVPPP の理論や技術を活かして一般科向けの研修を行い、この有用性を検討する。

「包括的暴力防止プログラム：Comprehensive Violence Prevention and Protection Programme: CVPPP」の理念、理論、技術を参考に作成。

研修目的：
一般科病院に勤務する看護師が患者・家族へ安心・安全な看護ケアができることを目的とする。

B. 研究対象

- 一般科病院 3 個
- 自治体病院 A (2 日間)
- 公的病院 B(1 日間)
- 民間病院 C (半日間)

C. 考察と結論

- 1. 研修生の属性に違いがあっても、研修後のアンケート結果はすべてにおいて“活用できる”と、とても良好であった。
- 2. 身体介入実技において、A と C 施設間に

有意差が見られたが、実技には時間が必要であり、それはニーズの強度で変化し得る。

- 3. コミュニケーションスキル演習や安心・安全なケアテクニックは活用できる。
- 4. 一般科用にアレンジしても研修生のニーズから大きく外れることはなかった。
- 5. 研修時間が違っても結果に全く差がないことから、基本研修時間 1 日間は妥当と言える
- 6. 今回は看護師対象に実施した結果であって、他の職種も対象にすることは現段階では判断できない。

次年度も、継続実施を既に依頼されており、加えて他の総合病院でも関連する研修依頼を受けている。暴力予防・対策問題への関心の高さと要請の多さが窺える。

時間	研修項目	内容
9:00 ~ 11:00	①理論 ②リスクアセスメント	講義 ・医療における暴力・攻撃性マネジメントトレーニングについて ・法的側面・リスクファクター・精神疾患と攻撃性 ・暴力の誘因・リスクアセスメントの手法
11:00 ~ 12:00	③怒り感情 ④コミュニケーション技術による興奮状態への介入法(ディエスカレーション)	講義 演習 ・感情を読むトレーニング ・コミュニケーション技法に則ったディエスカレーション
12:00 ~ 13:00	⑤安心・安全にケアするテクニック	演習 ・関わる時に注意するポイント ・患者に安心を与えるかかわり方
14:00	⑥身体的介入技法(ブレイクアウェイ)	・攻撃されたり、抑えられたりしたときに振りほどいてにげるためのテクニック(選択したテクニック)
15:00	⑦身体的介入技法(チームテクニクス)	・エスコートテクニックを主とする身体介入テクニック ・ベッドサイドでの応用テクニック
16:00 ~ 16:30	まとめ	グループで1日研修の振り返り

D. まとめ図

一般科看護師対象CVPPP研修 CVPPPの理論を活かせるのか？

文脈から得る一般科の課題等
研修対象は、人的管理、知識、疾患や状態による半面脅威低下
下で基本、暴力、風土、コミュニケーション問題、技術

一般科向けアレンジ、CVPPP研修の講義、アセスメント、精神科疾患者救、怒り、コミュニケーション技術演習
安心、安全な看護ケア技術
・ブレイクアウェイ、治療機、チームテクニクスの一部
・スキルの応用、ベッドサイドテクニック)

基本、日替研修研修準備時間
・講義、5時間
・コミュニケーション演習、5時間
・安楽ケア1時間
・実習時間
・ロールプレイ0.5時間
・グループワーク等
まとめ0.5時間

	表1 対象の属性			表2 研修後のCVPPP活用状況			結論
	A(n=19)	B(n=15)	C(n=7)	A(n=19)	B(n=15)	C(n=7)	
施設				講義	5	5	11
年代	20代	1	0	11	12	12	CVPPPの理論や技術を活用できる。しかし、安心・安全な看護ケア研修と強たほうがない。
	30代	4	8	6	1	0	
	40代	11	6	6	3	1	
	50代	3	1	2	8	10	
性別	男性	2	4	4	11	6	
	女性	17	11	23	8	4	
看護経験年数(平均SD)	21.4(6.9)	15.6(5.4)	12.4(6.3)	10	11	12	
精神科経験者	1	1	9	1	0	0	
暴力に関心ある	10	7	5	10	5	5	
研修後実践したい	18	15	27	18	12	10	
研修後実践していない	1	0	0	1	3	7	
研修後実践していない理由	16	15	26	16	2	0	
研修後実践していない理由	0	1	3	16	12	10	
研修後実践していない理由	9	0	17	9	10	11	

注：年代、経験年数などに差があるものの研修後や研修前における差も無い。
P<0.05

結果：結果はほぼ活用できているであった。
・特に安心・安楽とコミュニケーションは高い。

今後の予定：配付する今後の研修の準備

F.研究発表（別紙 4）

1.論文

北野 進 他：CVPPP は一般科医療に活かせるのか —文献レビューから見えること—, 精神科看護,41-49, 5(45), 2018

2.学会発表

G.知的財産権の出願/登録状況

1.特許 なし

2.実用新案 なし

3.その他

謝辞：主要課題Ⅱ. 「CVPPP の有用性・有効性を検証」で、参加協力して頂きました 4 病院関係者、参加者の皆様に感謝申し上げます。